



目次	
巻頭言 東日本大震災に思う	1
特集 図書館情報システムの更新	3
特集 新たに指定された貴重資料	5
本との出会いを楽しむ〈第7回〉	6
図書館に関する話題〈第7回〉	8
Library News	9
図書館のグループ紹介	11
本学教員等著作寄贈図書・資料一覧	12

東日本大震災に思う



附属図書館長 長谷川 成一

本年（2011年）3月11日の東日本大震災は、マグニチュード9.0の巨大地震とその後の巨大津波によって、我が国の災害史上、未曾有の規模の被害を及ぼしました。5月1日において死者1万4,701人、行方不明1万969人、避難者12万6,372人にのぼっています（『朝日新聞』2011年5月2日朝刊）。加えて、福島第一原子力発電所における事故が広域にわたる放射能汚染を引き起こし、我が国では経験したことのない複合災害の様相を呈しました。

現在、官民あげて懸命な復旧・復興に取りかかっている最中ですが、本学では被災地への学生ボランティアや医師等の派遣（DMAT、被ばく調査等）、被災大学への救援物資提供などの救援・支援活動を展開しています。

本学附属図書館では、幸いなことに本館・分館ともに被害がなく、被災当日、館内にいた学生・職員にも怪我をした人はおらず、館長としても安堵したことでした。3月18日午前9時、国立大学図書館協会（略称は国大図協）から、被災した大学の教職員・学生が他大学の図書館の利用を申し

出た場合、是非協力をお願いしたいとの緊急要請が届きました。本館では直ちに協議して、同日の午前11時前には要請を受け入れる旨を国大図協へ回答をしました。その段階では、国大図協の要請に応じたのは、東北地方の国立大学では弘前大学のみでした。

毎日、震災の報道が新聞紙上に大きく取り上げられ、諸君も大きな関心を寄せて記事を読んでいることでしょう。私は、先年、中央防災会議の「災害教訓の継承に関する専門調査会」に所属して、我が国の巨大な歴史災害（地震に限らず、津波・火災・風水害など）の解明と分析を通じた、災害教訓を考察する作業に従事しました。

このたびの東日本大震災の被災地域が、青森・岩手・宮城・福島・茨城県など、おおむね太平洋沿岸地域であった点や巨大な津波災害だったことから、明治29年（1896）6月15日の「明治三陸地震津波」（三陸大津波と略記）との比較で言及されることが多いように見受けられます。三陸大津波はM8.2-8.5の巨大地震によって起こり、死者は2万1,915人にのぼっていますので、確かに、

その点ではこのたびの震災と似かよった災害でした。子細に見てみると、三陸大津波は午後7時32分ころ、震災は午後2時46分の地震の後、約30分後に津波が襲来しています。三陸大津波の被害が甚大であったのは、夜間の津波襲来であったため、電灯のない115年前の夜は現在とは比べようもないほど暗く、暗闇で避難が困難であったことが原因としてあげられています。加えて、午後7時半ころに起きた地震は、緩やかな長く続く地震動であったので、人々がさして気に留めずにいたところ、そこに巨大な津波が不意に襲来したことにあります。

詳細は省きますが、三陸大津波の災害教訓の中から、改めて我々が学ばなければならないことを述べましょう。このたびの震災では、強い地震動を感じたら沿岸部の住民は直ちに高台へ避難することが大事だということが改めて認識されました。このことは、すでに三陸大津波の被災後も教訓として広く喧伝されました。

前述のように、明治の三陸大津波では強い地震動がありませんでしたが、その40年前に三陸を襲った、安政3年7月23日（西暦1856年8月23日）の大地震と大津波では、2回の強い地震動のうち4波にわたる大津波が三陸海岸に押し寄せて大きな被害を出しました。安政地震と津波に遭遇し被災した人々の記憶には、強い地震動の後に津

波が来襲するということが刷り込まれていて、三陸大津波は強い地震動を引き起こさなかったので、津波に対する警戒がおろそかになり避難するのが遅れて甚大な被害を受けたという説もあります。

もう一つ、津波には多様性があります。「津波は引き潮から始まる」という言いつたえは、今日でもよく聞かれますが、津波は必ずしも引き波で始まるわけではありません。「揺れたら逃げる」を徹底することが津波被害から生き延びるためのもっとも重要な教訓です。自身の体験による教訓は大切ですが、過去の経験のみに基づいた判断が正しいとは限りません。津波災害に限らず、これから本学において新たな大学生活を始める新入生諸君にとっても、このことは勉学に精励する上で大事な教訓ではないでしょうか。私自身への自戒を込めて伝達し、希望溢れる皆さんへのエールとします。

【参考文献】

- ・国立歴史民俗博物館編『ドキュメント災害史1703-2003—地震・噴火・津波、そして復興—』（平成15年6月刊）
- ・中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査部会」編『1896 明治三陸地震津波報告書』（平成17年3月刊）

（はせがわ せいいち）

岩手県野田村における本学学生ボランティアの活動（写真は人文学部・山口恵子准教授の提供）



側溝に溜った泥やガレキをかき出す作業



体育館の中で衣類の仕分け作業をする様子